

灯りを運ぶ人

サキア・ハク (バングラデシュ)

1971 年のことでした。タズリマが結婚のため家を離れることになったのは 12 歳のときでした。結婚がどんな意味を持っているのか考えたことさえありませんでした。まだまだ遊びに夢中になっていたかつたし、勉強もしたかつたのです。家族や家事の負担を引き受ける準備はできていませんでした。

彼女の人生は思ったように進みませんでした。夫は彼女を義理の家族に預けたまま出稼ぎのために家を留守にしました。彼女は今まで以上に息苦しさを感じていました。

タズリマは学ぶことを望み、教育を放棄したくありませんでした。しかし他に道はありませんでした。同年代の子どもたちは遊んで過ごしていました。誰も勉強したいと思いませんでした。彼女は子供たちを集めて「私に勉強を教えさせて」と言いました。子どもたちは笑いました。しかし、彼女の決心は固く、ついに子どもたちは従うことになりました。子どもたちに絵を教えるように文字を教え、徐々にまわりの子どもたちは学び始めました。

バングラデシュではその当時、女兒の居場所は台所にあると信じられており、学校に行くことが許されていませんでした。この状況は今でも地方で見られます。私が仕事をしているテクナフでは、90%の女兒は 12 歳か 13 歳で結婚させられ、学校にいったことのあるものは一人もいません。男児でさえも教育を受けられないこともあります。

タズリマの義母は、彼女が実施しようとしていた夕方の読み書き教室のことを聞くと、彼女を精神的にも肉体的にも追い詰めていきました。義母は、女性は家の中にいて料理や家事をするべきであり、家族は教育を受けた女兒を必要としていないと考えていました。その頃人々は、教育は無用のものであり、例えば料理や出産など、言われたことだけをする無学の女兒を単純に欲していました。

タズリマの夫が彼女を窮地から救い出しました。夫が職場に連れ出すようになると、タズリマは新たな希望を見つけました。彼女は子供たちに勉強を教えるための学校をスタートさせ、勉強するように励まし続けました。それに関連して、彼女自身も

再び勉強を始めました。彼女はまた女兒に裁縫の仕方を教え、経済的に独立できるようにしました。最初は新しい技術を学ぶことで時間を「むだ」にしたくないと誰もが思いました。タズリマは氣力を失いかけてましたが、裁縫技術を無料で提供したところ、状況が変わり始めました。多くの女性たちがスキルを積み重ね、起業家へと転身したのです。彼女たちはお金を稼ぎ、それによって自信をつけ、夫に頼らなくてもよくなったのです。



すべてが好転していきましたが、タズリマはもっと社会に貢献したいと考えました。そこで「一日の終わり」を意味する「ベラセシ」という組織を作りました。

社会の多くの女性たちは高齢に達するとほったらかしにされます。夫は妻が更年期になると置き去りにしたり、高齢者の面倒を見たくないため、子供たちが親を捨てることもあります。男性であれば、置き去りにされても、ホームレスとして生き残り、またモスクで生活することができます。しかし高齢女性には選択肢がまったくありません。

タズリマの組織はこのような女性たちの味方です。女性たちを保護し、看護し、面倒をみます。

タズリマはおよそ 60 歳ですが、いまだに社会の女性たちのために働いています。彼女は多くの女性にとって励みであり、今でも多くの人々を力づけています。

